



立秋とは名のみの厳しい残暑が続いております。皆様、お元気でいらっしゃいますか。研究委員の皆様におかれましては、夏季休業中に英気を養いつつ、2学期からの校内研究活性化に向けて準備を進めていただいているところだと思います。また、先日の第5回研究会では、S市立S中学校の校内研究会を視察していただき、さらにアイデアを膨らませていただけたのではないのでしょうか。さて、プロ研通信第3号では、第4回研究会での研究委員の皆様の学びについてお伝えします。

第4回研究会 概要

第4回研究会は、8月2日(金)に行いました。この会では、まず、教員対象質問紙調査(始期)の結果を基に、研究委員の皆様各校の校内研究の今後の方向性について考えていただきました。そして、これまでの校内研究の取組や各校の先生方の学びを基に「校内研究省察ポスター」の作成を行いました。

第4回研究会の流れ

- 1学期の振り返り(交流)
- 教員対象質問紙調査の結果報告(説明)
- 「校内研究省察ポスター」の作成(演習)
- 専門委員より(指導助言)
- 振り返り



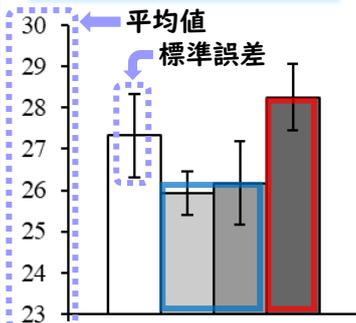
質問紙調査に関する協議の様子

教員対象質問紙調査の結果報告

6月末に、実践校で実施していただいた教員対象質問紙調査の結果を報告しました。そして、その結果を基に、実践校の実情を踏まえながら、教員一人一人の実践の状況や昨年度の自校の校内研究における教員の変容等について、研究委員の先生方と分析をしました。

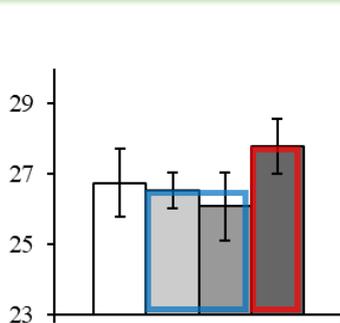
新たな教師の学びの姿

「新たな教師の学びの姿」に向かう行動がとれているか



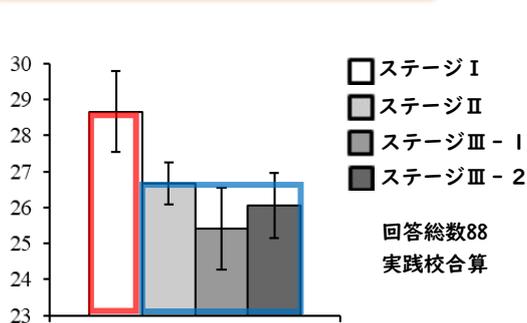
児童生徒が主体の授業づくり

「児童生徒が主体の授業づくり」が実践できているか



変容的学習尺度

昨年度の校内研究が、自分自身の考え方や行動を変容させるものであったか



□ ステージ I
□ ステージ II
■ ステージ III - 1
■ ステージ III - 2
回答総数88
実践校合算

分析の方法と「変容的学習」について

分析の際は、下記のように質問項目を三つのカテゴリーに分類し、各回答を数値化したものを滋賀県教育委員会が定める四つのキャリアステージ毎にグラフで表した資料を用いました。

《 三つのカテゴリー 》

- ① 変容的学習尺度
- ② 新たな教師の学びの姿
- ③ 児童生徒が主体の授業づくり

《 四つのキャリアステージ 》

- ステージⅠ : 教職経験1年目～3年目
ステージⅡ : 教職経験4年目～15年目
ステージⅢ-1 : 教職経験16年目～24年目
ステージⅢ-2 : 教職経験25年目～

チェック 「変容的学習」とは

それまでの人生経験によって形成された自分自身の価値観や行為の習慣を形作る枠組み(準拠枠)を変容させる学習のこと。(ジャック・メジロー「変容的学習理論」(1991)を参考)

研究委員による分析と2学期の取組について

研究委員の先生方には、はじめに、この結果を受けて、感じること・気付くことについて協議していただきました。そして、そのことを基にして、2学期の校内研究の活性化に向けた視点や手立てを考えていただきました。以下は、研究委員の先生方から出していただいた御意見の中から、いずれのカテゴリーの値も低かったステージⅡ・Ⅲ-1の調査結果と昨年度の校内研究の取組についての御意見をまとめたものです。

《 自校の現状と研究委員の分析 》

ステージⅡ・Ⅲ-1の調査結果について

- 経験を重ねる中で「こうあるべき」といった自己の考えが形成されていき、変容につながりにくい。
- 他の分掌での役割や業務の量に負担を感じていることで、校内研究としての授業づくりにまで手が回らないのではないか。
- 校内での役割や業務において中心的立場となっており、多くの負担があると感じる。それゆえに、中堅としての立場からくるプレッシャーや失敗をしたくない、周囲に認められたいという思いをもっていることが伝わってくる。
- 様々な業務や役割を任せられ、一定の自立が求められる年代であるが、自分の考えが正しいのか判断に悩み、「実践できている」と表明できるほどの自信が備わっていないのではないか。
- 自信のなさや不安の現れから、先輩教員の意見を採用したり、先輩教員を頼って意見を求めたりする傾向がある。その結果、自己決定の経験やそれに伴う学びが希薄になる。また、自分で決めたことを実践する経験が少ないのではないか。

昨年度の校内研究の取組について

- 研究主題に対して具体的なイメージがもてず、漠然とした理解となり、実践や成果につながらなかったのではないか。
- 研修等で学んだことの整理ができず、多様な考え方の中で揺れ動いているのではないか。
- 研究主題の変更や研究組織の改編により、研究の内容や方法が定まらず、実践や成果の実感につながらなかったのではないか。

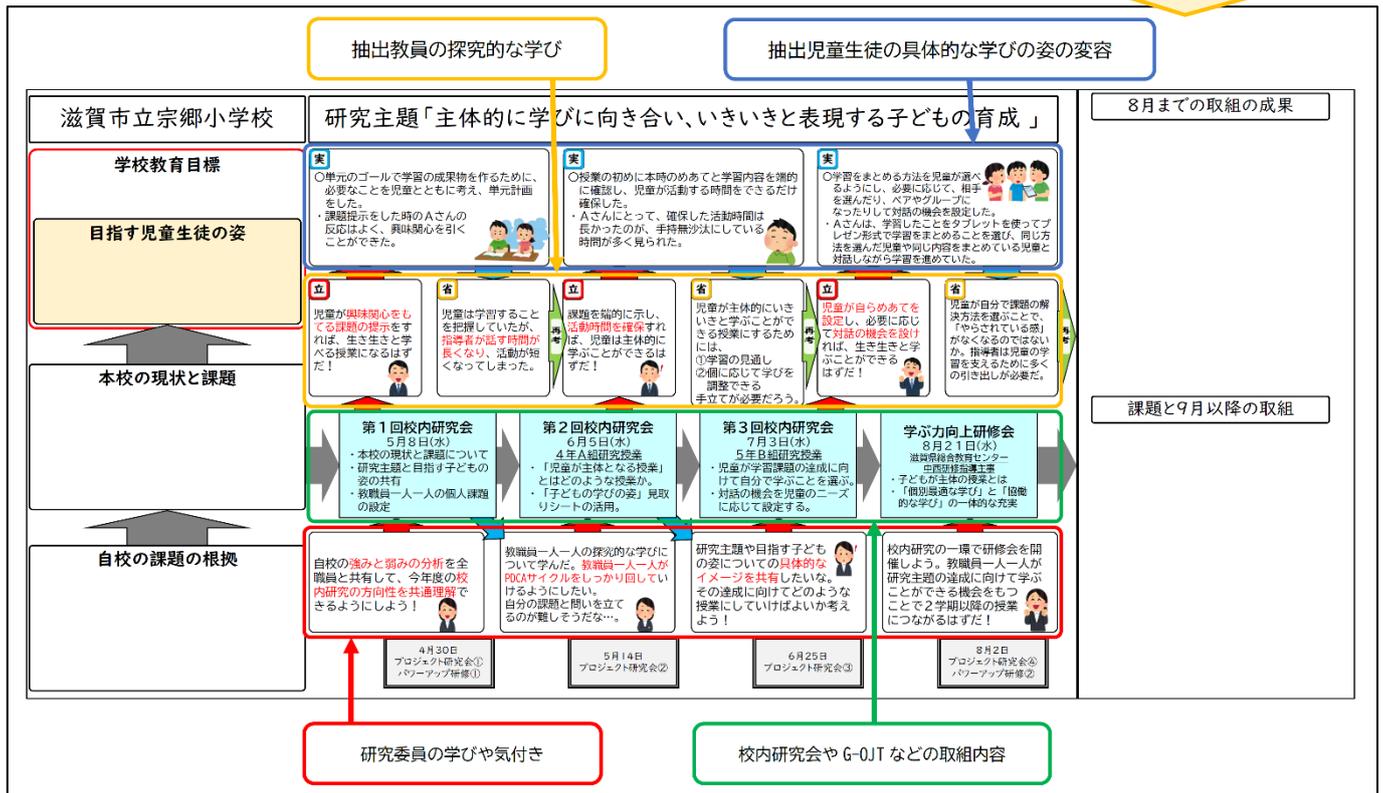
《 校内研究活性化に向けた視点や手立て 》

- 新たな視点や学びに対して面白さを感じる校内研究にする。
- 継続的な取組を、負担感を感じないように工夫することや業務分担の適正化によって、教員一人一人が安心して取り組める校内研究にする。
- OJT等を活用して、実践していることや困っていることを自由に話せる時間を設ける。周囲から認められ、自らの実践に自信をもてる機会にする。
- 児童のよい変容に着目して自らの実践に自信がもてる校内研究にする。
- 子どもの学びの姿を見取ることを通して、自らの実践を客観的に捉えて成果と課題に気付くことができる取組をする。
- 同年代でグループを組み、自らが考えた実践について交流をする機会を設けてみる。
- 研究主題や取組の趣旨等が、自校の教員にきちんと伝わっていない原因や背景を考えてアプローチする。
- 校内研究が自発的・主体的な取組になるように、定期的な実践を振り返る機会を設け、自らの実践の成果や課題を実感できるようにする。

数値として客観的に示された結果に実際の取組や教員の姿を重ね合わせて分析していただくことで、各カテゴリー・ステージにおける傾向をより具体化することができました。今回は主にステージⅡ・Ⅲ-1の調査結果を基に協議していただきましたが、上記の校内研究活性化に向けた視点や手立てについての御意見は、どのカテゴリーの先生方に対しても有効な視点や手立てであると感じています。教員一人一人が安心して学びに向かえる環境を整え、自らの学びを可視化でき、省察することを通して自信を深めることができる校内研究を目指すことが、今後の方向性の一つとして明らかになったのではないかと考えます。

「校内研究省察ポスター」の作成

「校内研究省察ポスター」のレイアウト



「校内研究省察ポスター」作成の目的

研究委員の皆様には、各実践校の1学期の校内研究会を振り返り、自校の学びの成果と課題を整理していただきました。この「校内研究省察ポスター」は、1学期の校内研究の中での、**教員の探究的な学びを振り返り、価値付け**してもらうために、また、実践校の先生方に、**教員の探究的な学びを具体的にイメージ**していただき、2学期以降の実践をさらに充実させるために行っています。



このポスターには、校内研究主任としての研究委員自身の学びや気づきを整理することはもちろんですが、各回の校内研究会での教員の学びやその学びに伴う児童の学びの様子も細やかに整理していただきたいと思います。ぜひ実践校の先生方全員でこのポスター作りに取り組むことを通して、「自分事」としての校内研究にしていきたいと思います。

この「校内研究省察ポスター」については、11月14日(木)開催予定の校内研究活性化プロジェクト研究第7回研究会(校内研究主任パワーアップ研修[小学校・中学校][第3回])の際に会場に掲示させていただきます。研修受講生の先生方に向けて実践事例として発表していただきたいと思います。御協力、よろしくお願いします。



「校内研究省察ポスター」について

「自分の経験や考えをアウトプットする際には、思考が伴うことが大切だ」と研究委員の先生方を見て思いました。ポスターを書くことで、1学期を振り返り、成果と課題が見え、仕上がった時には今後の方向性が見えてきます。やはり可視化するということが大事です。

「振り返り」を大事にする

校内研究を活性化させるには、「振り返る」ことが大事です。「目指す子どもの学びの姿」、そして「新たな教師の学びの姿」など、視点をもって校内研究を振り返ることで様々な意見が出てきます。その後、校内研究がよい方向に進んでいると感じられたらそのまま進めていけばよいし、停滞しているなど思われた時には、何か一石を投じるということが必要です。

一石を投じる

○振り返りを活用する

「目指す子どもの姿」を教員全員で共通理解できているでしょうか。「目指す子どもの姿は〇〇だ!」と示しているのですが、本当に共通理解できているかを確認しなければなりません。ビデオを撮り、「こんな姿やこんな姿が見られたらよい」を明確にして校内研究を進めていくことが大切です。

○テーマを与えてもらう

今日の質問紙調査の結果から、ステージⅡ～Ⅲの変容的尺度の評価が低いということが分かりました。経験を重ねると、考えが固まり、考え方を変えにくくなると思います。しかし、校内研究会の中で話すことのテーマを与えてもらうと、それについて考えますね。ですので、ベテランの先生に校内研究の終わり5分～10分、その方の得意な分野の話をしてもらうように頼んでみましょう。話すための準備をする中で、新しいことを学ぼうかなという気になってくださるかもしれません。

○外部から講師を招く

外部から講師を招くということは、刺激をいただくということです。校内だけでは煮詰まる内容について、講師を招くことは一つの手です。総合教育センターのサテライト研修で来てもらったり、附属小学校の教師は教科専門で研究していますので、呼んでいただいたりすることもできます。

○研究主任から投げかける

研究主任として気付かれたことを校内に伝えるときには、感想だけでなく「自分ならこうする」という代案を付けて話してください。校内研究の中でリーダーシップを発揮していくことは大変なことですが、子どもたちの力を付けようと思えば、先生たちの力を高めていくということが大事です。

研究委員のみなさんの振り返り

指導助言より

・齋藤先生の話の中にあつた、ベテランの先生に自分の得意なことで話をさせていただきミニ研修を設けてみるという内容は、自校のOJTの中では実施している部分があつたのですが、全体の場ではないので、職員会議の終わりなどの機会を活用して実践してみようと思ひました。

教員対象質問紙調査の結果より

- ・それぞれのステージにおける先生方の学びに対する意識がうかがえました。数値が低いから学ぶ意欲が低いのではなく、なぜ低い数値となったのかを分析する必要があるという話に納得することができました。
- ・ステージⅡ、Ⅲの先生方の結果の低さにはじめは驚きましたが、みんなで分析をしていく中で少し納得しました。生き生きと表現する子どもの育成をしていくためには、まず教員が困り感や実践を自由に話せる時間を作っていきたいと思います。
- ・改めて、自校の実態をよく知ったうえで校内研究の進め方を考えることが大切だということを実感しました。それぞれの学校で教員の姿は異なりますが、その教員の姿を研究主任が捉えたうえで課題に対してどのように切り込んでいくのかを考える必要があると思いました。教員が振り返りの機会をもつということの重要性を改めて認識しました。
- ・2学期以降の校内研究のあり方の課題が明確になりました。今まで通り継続しつつ、児童の学びが深まるような授業改善につながるアプローチについて考える時間となりました。
- ・年代ごと、特にミドルステージにおられる先生方のもつ教育観を、気軽に認め合える環境で話し合い、アウトプットする場を設けることが、自身の強みやそれに関わる授業観に影響してくるのでないかと考えました。仕事の負担や時間的な問題については、研究主任一人ではどうにもならないので、管理職と相談し「私は〇〇を大切にしている」というようなことを言いやすい職員室作りをしたいと思いました。

「校内研究省察ポスター」の作成より

- ・他校がどのように校内研究を進めておられるのか、どのような研究会をされているのかを少し知ることができました。時間がない中、授業研究会を多く行っておられたり、アンケートを実施されたりなど積極的に取り組んでおられると感じました。
- ・1学期に何ができていて何ができていなかったのかが分かりました。まずは、2学期にどのように進めていくかについて、研究推進委員の先生方と共に計画を立て直していきたいと思います。また、質問紙調査を再度分析し直し、自校の強みに変えていけるように様々な手立てを考えていきたいと思います。
- ・夏季休業中に(省察)ポスターに自校の教員それぞれの思いを書き込んでもらい、早くまとめて共通理解ができるようにしたいと思います。また、ポスターを2学期以降の校内研究にもっと活用できるような方法を考えていきたいと思います。

プロ研通信第3号 編集後記

この通信を書きながら、自分自身が初任者として赴任した学校で、初任者指導の先生に御指導いただいたことを思い出しました。やっとの思いでたどり着いた1学期末だったのを記憶していますが、私に向けて「1学期間よくがんばったね。これから夏季休業が始まるけど、夏季休業は教師としての力を蓄える期間ですよ。適度にリフレッシュして2学期に備えましょうね」という言葉をくださいました。正直なところ、「もう2学期のことを考えるの!？」と少なからず思っていました。しかし、今思い返せば「教師は学び続けなければいけないですよ」ということを教えていただいたのだと思います。その言葉を胸に、少しずつでも自分の学びを進めていこうと思った夏の一日でした。



研究員
しまうち ゆうしょう
島内 佑祥



研究員
たけうち たつや
竹内 達哉